

群 教 セ	F09 - 01
	平16.224集

「ほっとルーム」を拠点として、 組織的に機能する支援体制の充実

チーム援助や子育て支援を通して

特別研修員 見城 守（渋川市立北小学校）

< 研究の概要 >

不登校傾向や問題をかかえる児童に対して、関係の深い職員でチームを編成し、コミュニケーション作り、保護者との連携など、それぞれの役割に応じて支援を行ってきた。また、子育てに悩む保護者に対して「子育て支援セミナー」を実施した。これらの拠点となるのが「ほっとルーム」であり、組織的に機能する支援体制の充実をめざし、学校全体で取り組んだものである。

【キーワード：教育相談 ほっとルーム チーム援助 支援シート 子育て支援 信頼関係】

主題設定の理由

本校では5月現在、登校を渋りがちな児童が数名いる。児童への支援は担任が中心であり、その負担は大きいと考えられる。職員全体の共通理解や情報交換についても十分とは言えない。

また、学級懇談会の時など保護者から、「いうことを聞かない」「かわり方が分からない」等の話を聞く。家庭での子どもとの接し方、支援の仕方について保護者は悩んでいる。学校と保護者との相互の連携を密にして、子どもとのかわり方を共に学び合うことが必要であると考えられる。

そこで、「ほっとルーム」をこれらの課題解決の拠点ととらえ、組織的に機能する支援体制の充実を図ることをめざし、研究しようと考えた。まず、登校を渋りがちな児童の援助・指導については、年度当初からある教育相談部会を中心とした支援体制を築き、情報交換や共通理解を図っていく。特に対象児童については、学級担任だけの援助・指導ではなく、学年主任、教育相談担当、専科など支援できる教員で「チーム援助」を立ち上げ、児童の実態に即した支援を行っていく。

また、保護者に対しては、「PTA子育て支援セミナー」の実践を通して、子どもとのかわり方について支援する。保護者同士、保護者と教員が話し合うことで情報交換ができ、子育てに関して前向きに取り組む姿勢や互いの信頼関係を築いていきたい。さらに、得られた成果を情報発信し、家庭の教育力の向上を図る。

研究のねらい

不登校傾向や問題をかかえる児童に対して、「ほっとルーム」を拠点とした支援体制を築き、情報交換や共通理解を図っていく。さらに関係する教員でチームを組み、学習面、友達とのかわりなどの支援を計画的に実施する。また、子育て支援セミナーを通して保護者への支援、学校との信頼関係を築いていく。児童及び保護者への支援を学校全体で取り組むことにより、児童の安定した登校及び学校生活を目指すことをねらいとする。

研究の内容と方法

基本的な考え方

(1) 「ほっとルーム」を拠点とするとは

「ほっとルーム」を「教育相談機能」・「情報発信機能」の2つの機能としてとらえ、児童や保護者への支援の場として中心的な役割を果たすように運営していく。

ア 「教育相談的機能」とは

不登校傾向や問題をかかえる児童に対して、チームを組んで支援する（チーム援助）。「チーム援助会議」を開き、対象児童の情報交換を行い、援助方針・具体的な援助案・役割を決め、支援していく。支援の過程や児童の様子を「チーム援助シート」「支援シート」に記録し、情報を蓄積する。さらに、支援の評価・検討をし、より確かな支援へと改善していく。

イ 「情報発信機能」とは

しつけや子どものかかわり方に悩む保護者を中心に、子育て支援セミナーを実践し、学校と保護者との情報交換、学び合いを通して子育ての支援をしていく。校内教育相談をより一層推進していくためには、学校と保護者が連携を深めることが重要であると考え、そのための情報発信的な役割ととらえた。

「ほっとルーム」の2つの機能を有効に活用することにより、児童や保護者への支援に学校全体として取り組めるように運営していく。

(2) チーム援助とは

チーム援助は、対象児に対して支援できる人材を集め、同じ目標に向かってチームを組んで組織的に支援することである。本研究では、担任、学年主任、教育相談主任、コーディネーターで構成し、学習面、対人関係、保護者との連携など校内で取り組む支援活動を展開した。情報収集や具体的な援助場面においては、前担任や専科の支援も仰ぐこととした。コーディネーターはチーム援助会議の設定をしたり、援助策の提案、見直しをしたりする。また、「チーム援助シート」や「支援シート」を作成し、支援の過程や児童の変容についての情報を蓄積する。担任は、遊びの仲間づくりや温かい学級の雰囲気作りなど、人間関係の援助や家庭と連絡を取り援助の働きかけをする。学年主任は、学習面や行事における活動場面において援助し、教育相談主任は、担任との家庭訪問の実施や具体的な支援の方法についてアドバイスするなど、全体を見渡した援助をする。チームを組んで援助することは、普段見られない児童の様子などを多面的にとらえることができ、確かな支援につながるものである。さらに、チーム援助は担任の負担を軽減し、学校全体として取り組む支援体制でもある。

(3) 子育て支援セミナーとは

子育て支援セミナーは、子どもの成長や発達段階を考え、場面にあった子どものかかわり方について、学校と保護者が共に学ぶ場である。具体的には、保護者から子育てに関する悩み

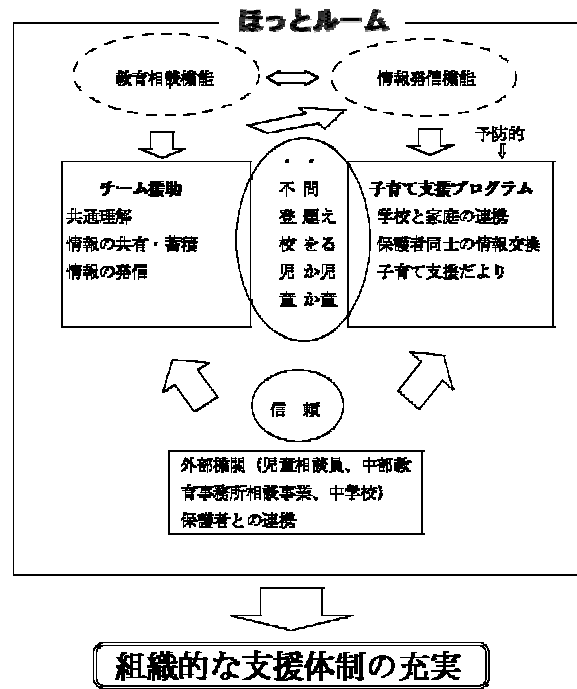


図1 「ほっとルーム」の機能

についてアンケート調査をし、その結果をもとに子どものかかわり方にポイントを絞った子育て支援プログラムを作成し実践する。プログラムの実践は、保護者同士、保護者と学校との情報交換、相互の信頼関係を築くものである。本研究では、学校から情報発信できる保護者への子育て支援として推進していく。

このようにして「ほっとルーム」を拠点とした支援体制を確立し推進することで、対象となる児童に対してチームで計画的に援助したり、子育て支援セミナーを通して保護者との信頼関係を築いたりする活動が効果的に行えらると思える。

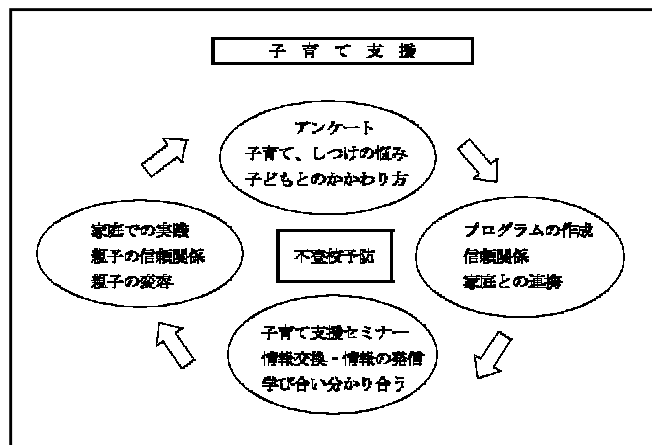


図2 子育て支援の活用

実践計画

- 7月 「ほっとルーム」の環境整備
 現在ある「ほっとルーム」をより落ち着いた空間になるような備品を整え、環境を整備する。また、支援の対象となる児童の情報や援助過程の記録が、今後の支援資料となるよう蓄積していく。
 全職員の共通理解を図る。
 運営委員会、職員会議において校内教育相談を組織的に推進することを確認し、確かな支援ができるような体制を築く。
- 8月 子育て支援プログラム、「ほっとルーム」の機能についての職員研修
 子育て支援プログラムのねらいや内容について理解を深め、保護者を対象とした子育て支援セミナーの実施に向けて準備する。
- 9月 外部機関との連携
 中部教育事務所教育相談事業を活用し、対象となる児童の理解を深め、具体的な援助策の提案を受け、実践する。
 教育相談部会の開催
 不登校傾向や問題をかかえる児童の援助・指導について、学校全体で取り組む支援体制を築き、チームを組んで組織的に支援することを確認する。
 「チーム援助」の立ち上げ
 対象となる児童に対して支援できる人材を集め、チームを組んで援助に当たる。チーム援助会議を定期的で開催し、情報の共有、情報の発信として機能させる。
 「チーム援助シート」の活用
 チーム援助シートを作成し、児童の特徴、家庭環境、援助方針について検討し、実践に生かす。
 「支援シート」の活用
 支援シートを作成し、援助の過程、児童の様子などの記録を蓄積する。さらに援助策の改善の資料として活用する。
 「ほっとルーム」(部屋)利用記録の活用
 本校では「ほっとルーム」を常時活用する児童はいないので、利用記録を活用し

- て学校全体の情報を得る。
- 10月 子育て支援セミナーの実践
学校と家庭の連携を深めることは、学校教育相談を推進する上で欠かせないものである。子育てについて学校と保護者が共に学び合い、分かり合うことを通して相互の信頼関係を築いていく。
- 11月 「子育て支援だより」の発行
子育てについての情報を提供することにより、校内の教育相談について啓もうを図る。
- 12月 まとめ

実践の概要と考察

1 実践の概要

(1) 子育て支援プログラム、「ほっとルーム」の機能についての職員研修

教育センターの指導主事、長期研修員を講師に招いて、子育て支援プログラムを中心に、全職員で研修会を実施した。場面構成に沿って役割演技をし、子どものかかわり方についての意見交換・情報交換をした。職員は和やかな雰囲気にも真剣に取り組み、我が子の子育てを振り返りながら、子どもの心の内面を感じたかかわり方について体験することができた。初めて体験する先生も多かったが、保護者への子育て支援が不登校問題の予防的な取組になることなど、理解を深めることができた。「小さい時、私の悩みを感じた母は、必ずドライブに連れて行ってくれた」という、一人の先生の言葉が印象的であった。保護者を対象とした子育て支援セミナー（10月に実施）に向けて、職員とPTA役員がチームを組んで実践にあたった。

(2) 子育て支援セミナーの実践

従来のPTAセミナーでも子育てに関する研修会はあったが、聞くことを主とする講演会であった。子育て支援セミナーは主体が保護者であり、保護者自身が子どものかかわり方について考え情報交換し、共に学び合う参加者体験型の研修会で、本校としては初めての実践であった。我が子の子育てを振り返り、親子の心のきずなを深めることを支援するセミナーは、学校と保護者の信頼関係を築く大きな一歩であったと考える。事前に教務主任（PTA担当）、PTA文化部長、コーディネーターでチームを組み、子育て支援セミナーの目的や内容、当日の運営などについて話し合った。PTA役員とチームを組んだことにより、保護者側からの意見も聞くことができ、セミナーを一緒に運営する意識が高められた。

ア 参加者のニーズの把握

セミナー開催のお知らせは全家庭に配布し、参加希望者から子育てやしつけに関する悩みについてアンケートを取った。結果をもとにしてセミナーのテーマを「子どもに自信を持たせるかかわり方」に決め、さらに、テーマに沿って子育てのポイントを作成した。テーマを中心としたプログラムの作成にあたっては、保護者の悩み（課題）を把握することが大切である。身近な悩みを取り上げ、互いに共感し、考え合うことを通して、参加者の心が一つになり、相互の信頼を深めていくと考える。

イ セミナーの展開

オリエンテーション

- ・セミナーのねらいの理解（講師の先生より）

ウォーミングアップ

- ・パスデイライン（グループ編成）
- ・自己紹介

4～5人のグループを作り、子どもが小さいときに使っていたおもちゃや写真を持ち寄り、小さいときのエピソードをまじえて自己紹介を実施した。子どもの日頃の様子や悩みについてまで話が進み、和やかな雰囲気作りができた。

ワーク（こんな時 どうする）

- ・職員による役割演技（場面1～3）
- ・グループによる話し合い・意見交換



図3 ポイントのまとめ

～自信を育むための4つのポイント～

- | |
|---------------------------|
| 1 「やろう」をキャッチしよう |
| 2 やり方が分かるとできそう |
| 3 うまくいなくても、そのがんばりを言葉で伝えよう |
| 4 責めないこと・見守ることが、次への意欲 |

まとめ

- ・家庭教育リーフレットの活用（講師の先生より）

ウ 保護者の感想

参加するまではどんな内容なのか、意見を人前で発表するのは苦手なので少し不安な気持ちで来ました。グループ形式で話し合えたので、話し出すと止まらず和やかな雰囲気の中で自分の考えを言うことができました。このようなセミナーは自分自身を見つめて、日頃ゆとりを持って子育てをしていないことに改めて気づかされました。子どものやろうという気持ちを大事にし、これからも子育てに頑張っていきたいと思います。



図4 役割演技の場面

子どもに対して親がどうすればよいのか分からない場面があることは、自分だけでなく他のお母さん達も同じことがあることが分かり、少し安心しました。これらを参考にして、子どもの気持ちも考えながら、怒ることだけでなく誉めることや違った言い方などができるようにしていきたいと思います。

今日のセミナーで他のお母さん方との話や先生とお話しできて、少しゆったりとした気持ちで家に帰れると思います。頭で分かっているけど行動に結びつくことがなかなかできませんが、今後あせらず、頑張りすぎずに接してみようと思います。本当に子育ては難しいですね。

エ 「子育て支援だより」の発行

学校教育相談をより一層推進していくためには、学校での取り組みを保護者に理解してもらうことが大切であると考えます。そこで、「子育て支援だより」を全家庭に配布し、学校での取組について情報を提供した。

資料1 子育て支援だより



(3) 不登校傾向の児童へのチーム援助

ア 第1回チーム援助会議

問題の概要については省略

A子の支援について、担任、前担任とコーディネーターでチームを作り、A子の昨年から今年までの様子について情報交換を行った。前担任とチームを組むことは、昨年までの指導の過程や本人の変容について確認するのに、大変有効であった。援助方針を立てるにあたっては「チーム援助シート」(資料2)を活用し、本人にとって今必要な援助について話し合った。具体的な支援は担任、学年主任、教育相談主任、コーディネーターでチームを編成し、それぞれの役割を決めて実践した。また、「支援シート」(資料3)を作成し、支援の過程やA子の変容についての情報を蓄積していくことを確認した。

資料2 チーム援助シート

(資料1)【チーム援助シート】 個人記録

チーム援助 ⇒ 「経緯が動く、子どもが変わる、学校が変わる」

項目	A子 (第 学年)		第(1)回チーム援助会議 平成16年9月 日()	
	学年担任 ○○ ○○		援助チーム構成員 ◎コーディネーター	学年主任 教育相談 学年() 教育相談担当 きめ細かな指導員
情報	概 要 《見立ての主体》		援助目標《方針》	具体的援助案：活動主体《役割分担》
本人 心理・社会面 学習面 健康・進路 家庭・他	<ul style="list-style-type: none"> よくお話ししてくれる。【家】 自分からは友達にかかわれない。【学校】 本人の観望は省略		<ul style="list-style-type: none"> ○学校において、他者とのコミュニケーションがスムーズに行えるようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○仲のよい子と積極的に作って遊ぶ。(対人関係能力を高める)【担任】 ○遊びを取り入れたエクスサイズを実施する。(マ)【教育相談担当】 ○一言日記の活用(本人とのコミュニケーションを深める)【担任】
	<ul style="list-style-type: none"> ・得意の事は空欄であった。【達成】 ・体育が好きである。【学校】 本人の観望は省略		<ul style="list-style-type: none"> ○学力向上に向けての援助を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○講師の個別指導(やればできる力がある)ので自信を持たせたい。(学年主任) ○「ふれあいコンクール」の行事の練習機会をとらえて支援する。(友達が覚えてきた教材)【教育相談】
	<ul style="list-style-type: none"> ・朝食を食べないことがある。【家】 ・出席日数4月(2日)、5月(3日)【学校】 本人の観望は省略		<ul style="list-style-type: none"> ○安心して登校できるように、家庭や医療機関との連携を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○欠席状況を把握し、本人と話し合う機会を多く持つ。(保健教諭)
	<ul style="list-style-type: none"> ・母は、適応指導教室の保護者会に参加した。【達成】 本人の観望は省略		<ul style="list-style-type: none"> ○家庭との情報交換を密に行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○通ってくる距離を少なくしていく。容易に休ませないよう協力を求める(担任)

- 1 -

イ 第2回チーム援助会議

A子への指導過程やその時の様子について情報交換を行った。チームを組んだ教員以外にもかかわりを持ってもらったので、A子の様子を多面的にとらえることができた。さらに、有効だった支援や改善点について話し合い、その内容を確認し実践を続けていった。

(ア) コミュニケーション作り

一言日記の活用

A子は担任とほとんど会話をしないので、日記を通してコミュニケーション作りを行った。日記には友達の様子や本人の気持ちを書くようになり、心を徐々に開いていった。

友達の支援

A子と比較的仲の良い友達でグループを作り、休み時間に遊ぶ活動を取り入れた。友達とコミュニケーションをとり、対人関係に慣れさせていった。

っとルーム」が情報発信として機能したと考える。

まとめと今後の課題

本研究では、不登校傾向や問題をかかえる児童に対して、かかわりの深い職員でチームを編成し、組織的に支援を行ってきた。支援に当たっては「チーム援助シート」「支援シート」の活用とともに、保護者との連携を密にし信頼関係を築いていった。その結果、保護者に変容が見られ、児童にも明るい表情が増えていった。また、子育てに悩みをかかえる保護者に対しては、「子育て支援セミナー」の実践を通して、親子のきずなを深め、よりよいかかわり方について共に学び合った。

今回の実践を通して、不登校傾向や問題をかかえる児童の安定した登校、安心した生活を送るための支援には次の点が重要であると考えられる。

不登校傾向や問題をかかえる児童に対して、学校全体で取り組む支援体制を築き、情報交換や共通理解を図る。

対象児童について関係職員でチームを編成し、それぞれの役割で支援していく。

保護者との連携を密にして、協力を得られるような信頼関係を築いていく。

今後の課題としては、次の点が上げられる。

チーム援助の推進にあたっては、コーディネーターの役割が重要である。従って広範囲に動けるよう担任外に位置づけていく。

組織がより機能するためには、定期的に教育相談部会が持てるよう年間計画に位置づけていく。

実践での学び

本研究は、不登校傾向や問題をかかえる児童及び悩みをかかえる保護者に対して、学校全体で組織的に支援を行ったものである。その実践を通して学んだことは、次の点である。

不安や失敗を恐れず、とにかく実践をしてみる。実践（体験）から学ぶことは大きい。

チーム援助や子育て支援セミナーは知識や体験が不足する中での出発であったが、職員や保護者の前向きな意見を聞くことができ、次へのステップに大きな支えとなった。

児童や保護者とかがわることが信頼関係を築く第一歩である。

信頼関係を築くことによって児童への支援は大きく前進していく。児童や保護者のニーズを把握したり、学校の取組を伝えたりすることは、相談しやすい学校作りにもつながっていくものと考えられる。

コーディネーターが動くことによって、職員の意識が変わる。

日常の中でもチーム援助等の情報を発信することで、他の児童についての情報交換へと発展し、具体的な支援に向けて担任が少しずつ動き始める。小さな動きが学校全体として取り組む大きなポイントになる。

< 主な引用・参考文献 >

- ・群馬県総合教育センター 『不登校問題課題解決支援資料』 (2004)
- ・石隈 利紀・田村 節子 著 『チーム援助入門 実践編』 図書文化(2002)